

【研究報告】

学校文化の地域性と起源

—大学・高校編—

国立大学法人京都大学理事 森田 正信

『地域連携教育研究』第2号（2018年2月）において、学校文化の地域性と起源について報告しましたが、今回、続編として、高校・大学文化の歴史性を中心に報告したいと思います。

前回、修学旅行、部活動、校歌、4月入学などの起源が戦前の高等教育（帝国大学、師範学校など）にあること、逆に、詰め襟の制服のように、中等教育で始まりその後大学にも取り入れられたものがあることを述べました。高等中学校を1894（明治27）年に改組して設置された旧制高等学校は、高等教育に位置付けられ、戦後、それは新制大学（教養部）に移行しました。戦後の新制高等学校は、戦前の旧制中学校などから移行した中等教育機関であり、「高等」教育機関ではありません。戦前と戦後では、高等教育（higher education）と高等学校（high school）の関係は制度的に変わったわけですが、両者の学校文化を見ることで興味深い歴史の一端がうかがえると思います。

1 学生文化の歴史

（1）学生スポーツ

我が国における**運動会**の起源は、海軍兵学寮（後の海軍兵学校）が行った競闘遊戯会とされますが、これは一回限りの開催でした。定期的に行われた最初は、北海道大の前身の札幌農学校の遊戯会とされます。1878（明治11）年から1923（大正12）年まで40回続いたとのこと。札幌農学校では、外国人教師によってスケートやスキーが紹介され、これら**冬のスポーツの我が国発祥の地**とも言われます。

部活動の発祥は、帝国大学（現・東京大学）の漕艇部とされます。ボート競技は、既に幕末に外国人居留地で行われており¹、**ボート部**は多くの大学で最も歴史のある部と言えます。「琵琶湖周航の歌」は、旧制第三高等学校水上部（ボート部）員の小口太郎が、1917（大正6）年の琵琶湖一周の際に作ったものが三高寮歌として歌い継がれ、戦後、歌謡曲となり知名度が上がりました。京都大の同窓生や滋賀県民の間では、本来の学歌や県民の歌より親しみを持たれていると思います。

ボート部以外では、野球部、陸上競技部、庭球（テニス）部などが歴史の長い部です。日本における**野球の発祥地**は、第一大学区第一番中学（後の開成学校、東京大学の前身の一つ）とされます。高校野球の夏の大会（全国高等学校野球選手権大会）は、1915（大正4）年の全国中等学校優勝野球大会が第1回ですが、これには前史があります。1901（明治34）年より、旧制三高野球部が主催し、同校グラウンドで、近隣の中等学校による連合野球大会を行っていましたが、当時圧倒的な強さを誇っていた旧制京都府立二中（現・鳥羽高）野球部OBで、京都帝大生の高山義三（後の京都市長）と三高野球部主将の小西作太郎が、全国大会の企画を大阪朝日新聞に持ち込んだことが開催の契機になったということです。第1回は京都府立二中が優勝、秋田中（現・秋田高）が準優勝でした。この時の会場は、箕面有馬

電気軌道（現・阪急電鉄）の豊中グラウンドで、**高校野球発祥の地**とされています。第10回大会から阪神甲子園球場が会場となり、2018年に第100回を迎えました。第1回から皆勤出場の学校が15校あり、この中には、後述する鳥取西高、愛知・時習館高が含まれます²。この夏の大会に対抗し、大阪毎日新聞が、1924（大正13）年、名古屋で開催した選抜中等学校野球大会が、現在の春の選抜高等学校野球大会の第1回で³、翌年から甲子園での開催となっています。第1回の優勝は高松商業、準優勝は早稲田実業でした。ところで、対戦チームが向かい合って一列に並び脱帽・一礼する**野球の試合前の挨拶**を始めたのは旧制第二高等学校（現・東北大）野球部だそうです。

健康診断の起源である活力検査、**修学旅行**の起源である長途遠足、**校内マラソン大会**の起源である健脚競争は、いずれも東京師範学校など筑波大学の前身校で始まっており、同大学に体育の伝統があることが分かります。**箱根駅伝**も、東京高等師範学校出身の金栗四三らの発案で、1920（大正9）年に始まりました。第1回は、東京高等師範、明治、早稲田、慶應の4校が参加して、2月に「四大校駅伝競走」として行われ、東京高師が優勝しました⁴。1月2日・3日に行うようになったのは戦後です。

柔道は、東京高師校長も務めた嘉納治五郎が創始した**講道館柔道**のことを指すのが一般的ですが、それとは異なる寝技中心の柔道があり、旧制の高校・専門学校で行われていたことから「**高専柔道**」と呼ばれます。これは、現在、旧七帝大の柔道部に受け継がれています。日本における**アメフト部**のルーツは、昭和初期の立教大にあり、戦前の東西大学対抗戦が甲子園ボウルの起源です。「**三・三・七拍子**」は、大正期に明治大の応援団長が、早稲田大との対抗戦で考案したものだそうです。

（2）学生生活・行事

近畿圏の大学で、学年のことを「**〇回生**」「**〇回**」と言うのは、帝国大学が学年進級制を採用していたのに対し、二番目に創設された京都帝大が、留年のない単位制をとったことからこの言い方が定着し、周辺の大学に広まったためです。**文系と理系の区別**は、1918（大正7）年、（旧制）高等学校令に、「高等学校高等科ヲ分チテ文科及理科トス」という規定が置かれ、これ以降、大学入学試験の準備段階で文系志望・理系志望に二分する方式が定着していきます⁵。

大学の**入学式、卒業式で演奏される曲**は、東京大、京都大、早稲田大、慶應義塾大をはじめ多くの大学で伝統的に、ドイツオペラ「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲だそうです。各大学のオーケストラ部や交響楽団が演奏しています。明治期日本ではワーグナーは西洋音楽を代表する作曲家だったことが背景になっていると考えられています⁶。なお、日本最初の**オーケストラ**は、慶應義塾大の学生団体だそうです。最も早い時期に「**蛍の光**」「**仰げば尊し**」を卒業式に取り入れたのは、東京女子師範学校（現・お茶の水女子大）、音楽取調掛（後の東京音楽学校、東京藝術大の前身の一つ）のようです⁷。なお、東京女子師範学校は、日本で最初の**校歌**を定めたとされ、また、東京藝術大のもう一つの前身校である東京美術学校は、我が国でヌードデッサンを初めて行ったところだそうです。卒業式のあとに、学生帽の白線を結んで川に流す**白線流し**は、テレビドラマで取り上げられ有名になりましたが、岐阜・斐太高校に旧制中学時代以来伝わる伝統行事です。

最も歴史のある**大学祭（学園祭）**は、東京外国語大の「外語祭」（起源は“講演会”）、東京農業大（前身は榎本武揚の創設した徳川育英農科）の「収穫祭」（起源は“運動会”）とされ、明治期まで遡ります。日本における**大学生協**の発祥は、明治期に創設された同志社学生消費組合です。九州帝大は、まず京都帝大福岡医科大学として設置されましたが、隣接地に遊郭があることが**学生の教育環境**として問

題とされ、地元の努力により遊郭を全面移転し、九州帝大創設を実現したという経緯があります。北海道大には、戦後、学生が大学構内の屋外で**ジンギスカンパーティー（ジンパ）**を行う伝統が40年以上続いています。数年前に、マナー違反の問題が起こり、大学側が禁止したそうですが、復活を求める学生の署名が行われ、2か所の専用エリアで、5～10月の間、事前申請制により再開されました。

2 武家文化の流れ

(1) 城跡などに所在する大学・高校

金沢大のかつての丸の内キャンパスは、加賀藩・金沢城址にあり、**城内キャンパス**として知られました。現在は、郊外の角間地区に移転しましたが、今も旧キャンパスには、旧制第四高等学校本館が記念館として現存し、重要文化財になっています。滋賀大彦根キャンパス（前身が彦根高等商業学校）は彦根城三の郭跡に、静岡大の附属静岡小・中学校は駿府城のお堀に挟まれた三の丸跡にあります。こうした例があるのは、明治に入り廃藩によって旧城地は兵部省の管轄に入り、多くは師団司令部、兵営など軍用地に当てられましたが、その移転後は各種の公共施設の用地とされたためです。

城郭跡に立地する公立高校としては、例えば、佐賀・鹿島高は鹿島城本丸跡、長崎・五島高は福江藩・石田城本丸跡にあり、両校とも**城門が校門**になっています。水戸第一高は水戸城本丸跡にあり、水戸城唯一の建築遺構で県指定文化財の「薬医門」が同校敷地内に現存します。長野・上田高は上田藩主館跡にあり、表御門が校門になっており、石川・小松高校内には小松城天守閣の石垣跡があります。三重・上野高は伊賀上野城扇之芝跡にあります。滋賀・彦根東高は彦根城二の郭の、大阪・岸和田高は岸和田城のいずれも家老屋敷跡に立地しています。鳥取西高は、鳥取城の三の丸などの跡地にあり、史跡の保護のため、県の文化財保護審議会が校舎の移転を要望しましたが、同窓会やPTAの要望により、結局、現在地で改修することになりました。

東京大の本郷キャンパスは、加賀藩の江戸屋敷跡であり、同藩の13代藩主が将軍・徳川家斉の娘を正室に迎える際に創建したのが赤門です。国の重要文化財になっています。

(2) 藩校の伝統を受け継ぐ大学・高校

最大規模の藩校であった水戸藩の**弘道館**を含め、藩校は明治に入っていずれも閉校されたため、現在の学校の起源を直接、藩校に求めることは難しいのですが、その伝統を受け継いでいる学校はあります。

薩摩藩の造士館も、やはり明治に入り廃止されましたが、その後、その伝統を受け継ぐ旧制第七高等学校造士館が設置され、戦後、鹿児島大文理学部（現・法文学部、理学部）に移行します。加賀藩の明倫堂の流れを汲む旧制第四高等学校を受け継ぐ金沢大、長州藩の山口明倫館の流れを汲む旧制山口高等学校を受け継ぐ山口大などにも藩校の伝統が継承されていると言えます。

しかし、このように**藩校の流れを受け継ぐ大学**というものは多いとは言えず、旧制中学や尋常小学校・高等小学校に引き継がれ、現在の高校や小学校が受け継いでいる場合が結構見られます。

藩校の伝統を受け継ぐ公立高校の例としては、山形・米沢興譲館高校（米沢藩興譲館）、福島・会津高校（会津藩日新館）、新潟・高田高校（高田藩修道館）、愛知・明和高校（尾張藩明倫堂）、同・時習館高校（豊橋・吉田藩時習館）、三重・津高校（津藩有造館）、福井・藤島高校（福井藩明道館）、滋賀・彦根東高校（彦根藩稽古館）、愛媛・松山東高校（松山藩明教館）、福岡・修猷館高校（福岡藩修猷館）、同・明善高校（久留米藩明善堂）、同・伝習館高校（柳川藩伝習館）などがあります。彦根東高の校訓は、彦

根藩主・井伊家の軍勢の色から来た「赤鬼魂」であり、松山東高の校内には県指定文化財の明教館講堂が現存します。藩校とは異なりますが、岡山藩が創設し、**庶民を受け入れた最古の公立学校**とされる**閑谷学校**の流れを引き継いでいるのは、岡山・和気閑谷高校です。

藩校の跡地に立地するなどその名を引き継ぐ公立小学校の例としては、京都市・明親小(淀藩明親館)、福知山市・惇明小(福知山藩惇明館)、舞鶴市・明倫小(舞鶴・田辺藩明倫齋)、萩市・明倫小(萩藩明倫館)などがあります。校名は引き継いでいませんが、宮崎の高鍋東小は、高鍋藩の明倫堂の建物で開校した小学校を起源としています。各地に「明倫」の名の付く藩校がありましたが、これは孟子の「人倫を明らかにす」から来ています。

ちなみに、現在の中学校は戦後できた制度なので、戦前からの流れを汲む公立中学校はありません。福山市・誠之中学校や北九州市・思永中学校は、藩校の名が付いていますが、設置は戦後です。福山藩主で老中の阿部正弘が創設した誠之館の流れは二つの学校に継承されており、一つは広島・福山誠之館高校で、校内に誠之館の旧玄関が現存し、登録有形文化財になっています。もう一つは同藩の江戸藩邸に置かれた藩校の流れを汲む文京区・誠之小学校です。また、小倉藩の思永館の場合は、明治に入り育徳館となり、戦後、豊津高校を経て、その流れは現在の福岡・育徳館高校に継承されています。

ところで、藩校の名を引き継ぐ公立高校が、福岡に複数ありますが、藩校以外でも、九州には、薩摩藩主・島津家の居城の名を受け継ぐ鹿児島・鶴丸高校や、明治期に国権派士族によって設立された学校名を受け継ぐ熊本・済々黌高校などもあります。戦後、日本に進駐した米陸軍部隊第八軍の九州地方軍政部が、封建時代や戦前期の伝統を汲んだ命名を厳しくチェックしなかったことがうかがわれます。

3 女子教育の歴史

(1) 女子大の歴史

戦前の大学は、男子のみが入学可能でしたが、大正期に東北帝国大学理科大学(現・東北大理学部)が**我が国で初めての女子の大学生**3人を受け入れました。当時の文部省は「前例これ無き事にて頗(すこぶ)る重大なる事件」と再考を求めたものの、大学が押し切ったそうです。

我が国初の女性博士は保井コノで、1927(昭和2)年に東京帝大が理学博士(植物学)を授与し、その2年後、東北帝大が初の女子大学生3人のうちの黒田チカに理学博士(化学)を授与しました。

こうした例を除くと、戦前は、**女子のための官立高等教育機関**は、東京女子高等師範学校(現・お茶の水女子大)、奈良女子高等師範学校(現・奈良女子大)に限られました。**女性初の国立大学長**は、丹羽雅子・奈良女子大学長で、ようやく1997(平成9)年になってからです。

これに対し、**女子教育に私学が果たした役割**は大きいものがあり、戦前期、多くの**先駆的な女性教育者**が貢献しました。代表的な例を挙げると、広岡浅子が協力し、成瀬仁蔵が創設した日本女子大学校(現・日本女子大)、津田梅子が創設した女子英学塾(現・津田塾大)、新渡戸稲造と安井てつが創設した東京女子大、A.J.スタークウェザーが新島八重と始めた女子塾(現・同志社女子大)、鳩山春子(鳩山由紀夫・鳩山邦夫氏の曾祖母)が創設した共立女子職業学校(現・共立女子大)、大妻コタカが創設した大妻技芸学校(現・大妻女子大)、下田歌子が創設した実践女学校(現・実践女子大)、横井玉子が創設した女子美術学校(現・女子美術大)などがあります。医学分野でも、吉岡彌生が創設した東京女医学校(現・東京女子医大)、額田豊・額田晋が創設した帝国女子医学専門学校(現・東邦大医学部(共学))、濱地藤

太郎が創設した大阪女子高等医学専門学校（現・関西医科大（共学））などがあります。これらは、旧制の専門学校の位置づけであり、大学ではありませんでした。**男子の旧制専門学校への女子の入学**は、大正期に東洋大学が初めて認めました。なお、日本女子大学校は2015年の朝ドラ『あさが来た』、帝国女子医学専門学校は2012年の朝ドラ『梅ちゃん先生』でモデルとされ、同志社女子塾は2013年の大河ドラマ『八重の桜』で描かれました。

（2）女子高の歴史

戦前は、**中等教育における女子教育**も、特に**キリスト教系の私学**が大きな役割を果たしました⁹。例えば、**日本最古のミッションスクール**とされる、M.キダーがヘボン施療所で始めた授業（現・フェリス女学院）、築地外国人居留地に設置され、**明治以降の日本で最初のクリスマス**を祝ったとされるA六番女学校（現・女子学院）、同じ居留地にフランスのサンモール修道会が創設した築地語学校（現・雙葉学園）、C.M.ウィリアムズが創設した立教女学校（現・立教女学院）、フランスのシャルトル聖パウロ修道女会が創設し、森鷗外や西園寺公望の娘も通った女子仏学校（現・白百合学園）などが長い歴史を持ちます。また、マーサ・J・カートメルが創設した東洋英和女学校（現・東洋英和女学院）は、2014年の朝ドラ『花子とアン』のモデルとされました。キリスト教系以外では、跡見花蹊が創設した跡見女学校（現・跡見学園）は、「**ごきげんよう**」の挨拶発祥の**学校**とされます。これらのうち、フェリス、立教女学院、東洋英和、跡見学園は、戦後、大学や短大も設置しています。

府県立では、京都の「新英学校及女紅場（にょこうば）」（現・同府立鴨沂高校）が最初の女学校とされます。この学校は五撰家の九条家別邸で開校しており、その表門が今の鴨沂高の校門になっています。

その後各府県に設置された旧制中学は男子校で、女子には高等女学校が設けられましたが、戦後、新制高校に移行する際、占領軍の地方軍政部は共学化を指導し、公立高校は**男女共学**が原則となりました。例えば、京都では、府立第一中学が洛北高校に、第二中学が鳥羽高校に、府立第一高女が鴨沂高校、市立第一高女が堀川高校というように移行していますが、いずれも共学化しました。岡山では、第一岡山中学と第二岡山高女が統合して岡山朝日高校に、第二岡山中学と第一岡山高女が統合して岡山操山高校に移行していますが、やはりいずれも共学化しました。多くの都道府県で同様に共学校になりました。

ところが、米陸軍部隊第八軍の第九軍団（仙台）は、共学化について厳しい指導を行わず、**北関東から東北の地域に男女別学の公立高校**が長く残ることとなりました¹⁰。例えば、宮城の仙台第一中学、第二中学はそれぞれ男子校のまま仙台第一高校、第二高校に、宮城第一高女、第二高女はそれぞれ女子校のまま第一女子高、第二女子高になり、また、栃木の宇都宮中学は男子校のまま宇都宮高校に、宇都宮高女は宇都宮女子高になりました。近年、宮城など多くの県で共学化が進み、別学校は減少していますが、栃木、群馬、埼玉ではなお別学校が残っています。地元や同窓会の意向が影響しているためです。

4 戦前期近代学校建築の伝統

（1）大学のシンボル

重要文化財に指定されている明治期の学校建築で最も歴史がある明治初期のものは、東京医学校（東京大の前身の一つ）本館（現・東京大総合研究博物館分館）、札幌農学校（初代教頭が米国・マサチューセッツ農科大学長であったW.S.クラーク博士）の演武場（現・札幌市時計台）、龍谷大学（大宮学舎）本館などで、いずれも洋風の木造建築です。それに続くレンガ造では、同志社大の礼拝堂やクラーク記

念館（米国の資産家 B.W.クラーク夫妻の寄附による）、慶應義塾大の図書館旧館のような**各大学のシンボルとなっている建物**が重要文化財です。

その後の洋風木造建築では、旧山形師範学校（現・山形大地域教育文化学部）本館が重要文化財で、戦後、山形北高校（前身は山形第二高女）校舎となり、現在も、同校内にあって県立の教育資料館になっています。明治後期のものとしては、旧奈良女子高等師範学校本館（現・奈良女子大記念館）、旧米沢高等工業学校本館（現・山形大工学部の資料展示室）は重要文化財、旧東北帝大農科大学（現・北海道大農学部）林学科教室（現・北海道大古河記念講堂）が登録有形文化財です¹¹。東北帝大は、古河財閥の寄附により、後に北海道帝大となる農科大学がまず建設されたので、発足の地は札幌です。奈良女子大には、戦前・戦中に天皇・皇后陛下の御真影と教育勅語を保管していた奉安殿の建物が今もあります。全国の学校にあった**奉安殿**は、戦後取り壊されましたが、奈良女子大の場合は、教員が遺伝研究のためにショウジョウバエの飼育室として使う許可を GHQ から得たため残ったと伝わります。

大正期の重要文化財としては、旧盛岡高等農林学校本館は、現在は岩手大農学部の資料館に、旧制松本高等学校（現・信州大）本館は記念館になっています。東大のシンボルの安田講堂は、東京帝大建築学科教授の内田祥三（後の総長）が設計した鉄筋コンクリート造で登録有形文化財です。文化財以外では、京都帝大建築学科教授の武田五一が設計した京大の時計台は安田講堂と同じ 1925（大正 14）年、慶應義塾大の塾監局（大学本部のことを慶應ではこう言います。）はその翌年の建設です。

昭和初期の重要文化財としては、早稲田大のシンボルの大隈講堂があり、早稲田大建築科教授の佐藤功一らの設計です。東京商科大学（現・一橋大）の兼松講堂や神戸商業大学本館（現・神戸大六甲台本館）、関西学院大（西宮上ヶ原キャンパス）の時計台は、登録有形文化財です。

（2）歴史ある高校校舎

重要文化財に指定されている明治期建設の高校施設としては、旧福島県尋常中学校本館（現・安積高校内、歴史博物館）、旧茨城県立土浦中学校本館（現・土浦第一高校内）、富山県立農学校本館（現・南砺福野高校の巖浄閣）、岡山・津山高校（前身は津山中学）本館などがあり、いずれも木造洋館です。

関東大震災後には、鉄筋コンクリート造（RC）校舎が建設されるようになりました。**大正・昭和初期建設の RC 校舎を今も使う公立高校**が、全国に十数校あり、多くが自治体指定の有形文化財や国の登録有形文化財になっています。例えば、大阪・四條畷高、大阪市立工芸高、京都・鳥羽高、奈良・畝傍高、滋賀・八幡商業高、高知追手前高、福岡高、長崎・島原高、熊本・玉名高、鹿児島・甲南高、鹿児島中央高などで、近畿、九州に多く見られます¹²。これらは、いずれも旧制の中学、工業学校、商業学校に起源を持つ学校ですが、鹿児島中央高だけは戦後の新設校にもかかわらず、旧制高等女学校の校舎を使っています。鹿児島では、旧制鹿児島一中と一高女が戦後、鶴丸高に移行して旧・一高女の RC 校舎を、二中と二高女が甲南高に移行し旧・二中の RC 校舎を使っていました。昭和 30 年代の生徒急増期に鹿児島中央高を新設することとなり、旧・一中跡地が建設予定地とされたのですが、一中跡地を新設校が引き継ぐことに異論が出て、結局、鶴丸高が一中跡地に新校舎を建設して移転し、鹿児島中央高が旧・一高女の校舎で開校したという経緯があります。

（3）校門に残る学校の歴史

重要文化財に指定されている明治期の校門としては、学習院・旧正門があります。これは鉄製で、現在は、学習院女子大、女子中・高等科の正門として使われています。また、旧制第五高等（中）学校の

校門は、現在は、熊本大黒髪北キャンパスの正門として使われています。同キャンパスに残る旧制五高本館（現・記念館）と共に、重要文化財になっています。

京大の本部構内と吉田南構内は東一条通（吉田神社参道）を挟んで向かい合っていますが、いずれの正門も旧制第三高等（中）学校の校門だったもので、登録有形文化財です。京都帝大が設立される際、旧制三高は、その土地を京都帝大に譲って、南側隣接地に移転しました。現在の本部の正門は、移転する前の三高の校門だったものであり、移転後に造られた三高の校門が現在の吉田南構内の正門です。岡山朝日高校は、旧制第六高等学校（現・岡山大）跡に立地しており、旧制六高の校門が今も使われています。旧制六高の書庫や柔道場も現存し、校門と共に登録有形文化財です。旧制第八高等学校（現・名古屋大）校門も登録有形文化財で、現在は移築され、愛知・犬山の明治村の正門として使われています。

5 我が国の大学の起源

（1）我が国最古の大学

栃木の**足利学校**は、日本最古の学校とされ、フランシスコ・ザビエルは「坂東の大学（アカデミア）」と記しています。創建は平安初期ないし鎌倉期とされ、儒学、易学、兵学、医学などを教えたそうですが、明治に入り廃止されました。

現在まで続く**最も歴史の長い大学**は、福沢諭吉が蘭学塾を始めた1858（安政5）年を創立年とする慶應義塾大と考えるのが順当だと思います。ただ、前身校の起源を遡ると、戦前、宮内省所管の官立学校であった学習院大は、1847（弘化4）年に仁孝天皇が公家の教育機関として京都に設けた学習院を起源としており、慶應より古いことになります。しかも、学習院の淵源を更に遡ると、飛鳥時代から平家政権の時代まで存在した、公家対象の官吏養成機関である大学寮が幕末に再興されたものが学習院とされており、その意味でも最古となります¹³。

最も歴史の長い国立大学は、1877（明治10）年に創立された東京大です。ただ、北海道大が、札幌農学校の設置された1876（明治9）年を“創基”年としています。また、大阪大は、医師・蘭学者の緒方洪庵が1838（天保9）年に開いた適塾が“原点”だとし、東北大医学部は1817（文化14）年の仙台藩医学校まで“源流”を遡れるとしています。しかし、東大の淵源は、1630（寛永7）年に林羅山が建てた家塾まで遡れます。この家塾は、湯島聖堂、昌平坂学問所の前身に当たり、現在、湯島聖堂には「**日本の学校教育発祥の地**」の掲示があります。なお、「昌平」とは孔子の生誕地の地名であり、上記の足利学校の所在地も昌平町です。

日本初の博士を授与したのも帝国大学です。1888（明治21）年、後に東京帝大、九州帝大、京都帝大の総長も務める物理学者の山川健次郎ら25名に授与されました。授与日の5月7日は「**博士の日**」とされています。

（2）大学への昇格の歴史

高等教育機関には、大学のほかに、専門学校がありますが、戦前にも（旧制）専門学校があり、そのほか、旧制高校、師範学校などが高等教育に位置付けられていました。こうした大学以外の高等教育段階の機関について、「**大学**」への昇格を図る大きな制度改正がこれまで二度ありました。

一度目は、1918（大正7）年に公布された「**大学令**」です。これ以降、それまでの（旧制）専門学校が大学に昇格しました。例えば、私立では、早稲田大学、慶應義塾の大学部、同志社大学、立命館大学

などが正式な大学になりましたし、官立では、東京高等商業学校が東京商科大学（現・一橋大）に、神戸高等商業学校が神戸商業大学（現・神戸大）に、千葉医学専門学校が千葉医科大学（現・千葉大）に、東京高等工業学校（前身は東京職工学校）は東京工業大学になりました。

米国でも、MIT（マサチューセッツ工科大学）のように、かつて University を名乗れなかった機関が今も Institute を名乗っています。東京工業大も現在、英語名に Institute を使っています。

二度目は、戦後の**新制大学への移行**です。1947（昭和22）年、旧制の高校、専門学校、師範学校等が統合し、「1県1国立大学」が一斉に誕生しました。例えば、信州大学は、長野の高等工業学校、師範学校、松本の医学専門学校、旧制高校、上田の蚕糸専門学校、伊那の農林専門学校が統合して誕生したため、今でも、各学部がそれぞれの地に分散しています。信州大ほどでないにしてもキャンパスが複数に分かれている国立大学が多いのは、同じような経緯によるものです。

大学以外の高等教育機関を大学に昇格させる例は他国でもあり、例えば、英国でも、かつてのポリテクニクが、1992年に一斉に大学に昇格しています。

6 大学名に表れる歴史的経緯

（1）地名と大学名

長野県は県土が広く、一体感が薄くなりがちであり、それが、信州大の附属長野小学校（前身は長野県師範学校附属小学校）の校歌「**信濃の国**」を、県歌に制定した背景にあると言われます。こうした事情は**信州大学**の名称にも表れており、戦後、新制大学移行時に、長野と松本の綱引きから、長野大学でも松本大学でもない名称になったという経緯があります。ただし、現在は、上田市に公立の長野大学、松本市に私立の松本大学があります。

横浜国立大学の校名に「国立」と入っているのにも経緯があります。横浜には、横浜国立大学以外に、横浜市立大学（前身は市立経済専門学校）、私立の神奈川大学（前身は私立横浜専門学校）がありますが、戦後、新制大学設置の際、3校から「横浜大学」という名称の申請が出され、調整の結果、各校とも「横浜大学」を使用しないと決めました。横浜大学という大学は、現在もありません。

東京女子高等師範学校は、御茶ノ水から大塚に移転した後、新制大学移行を迎えます。その際、大学名をどうするかが問題となりました。既に私立の東京女子大学があること、所在地が大塚であることから、「東京国立女子大学」「大塚女子大学」などの案も検討されたようですが、最終的には、移転前の所在地名をとった**お茶の水女子大学**となりました。ちなみに、御茶ノ水という地名は、将軍家の茶の湯用の水をとっていたことに由来します。

前身校のあった地名を大学名としているのは、**一橋大学**も同じです。東京高等商業学校は、大学に昇格した際、東京商科大学となり、関東大震災による被災のため、神田一ツ橋から国立市に移転し、新制大学移行を迎えます。その際、学生の投票により、移転前の地名をとって一橋大学の校名に決めたということです。なお、一ツ橋という地名は、同地にある橋の名前から来ています。江戸時代には、ここに江戸城一橋門が造られ、御三卿の一橋家の家名は同門内に屋敷を持ったことに由来しています。

上記の信州大、横浜国立大の例があるように、戦後の「1県1国立大学」発足時、常に県名が国立大学名になったわけではありません。現在、青森大、神奈川大、愛知大、奈良大、兵庫大、福岡大、沖縄大は私立大学であり、宮城大、長野大は公立大学です。**弘前大学**は、津軽藩の城下町である弘前にあつ

た旧制学校を前身としていること、**琉球大学**は、琉球列島米国民政府の統治下で設置されたことが校名に反映しています。石川大学、栃木大学という名の大学はありません。**金沢大学**、**宇都宮大学**が県名を付けていないのは、(旧制)金沢医科大、宇都宮高等農林など前身校の名称を引き継いだためと思われる。前身が逓信省の無線電信講習所である**電気通信大学**は、地名自体が付いていません。

(2) 人名と大学名

米国の私立大学には、創設時の**寄附者である篤志家・資産家の名を冠する大学**が多数あります。例えば、ハーバード大学(牧師)、コーネル大学(電信事業家・上院議員)、イェール大学(東インド会社総督)、スタンフォード大学(鉄道事業家)、ジョンズホプキンス大学(投資事業家)、デューク大学(たばこ事業家)、カーネギー・メロン大学(鉄鋼事業家及び銀行家)などです。日本では、これに類する例に、津田塾大、大妻女子大、跡見学園女子大、北里大、豊田工業大、川崎医科大などがあります。桜美林大学の名称は、創設者の清水安三が留学した米国・オベリン大学の名前から来ていますが、そのオベリンも、フランス人牧師の名前です。

また、ドイツの州立大学には、正式名称が**国王や政治家の名前**という大学が多数あります。ボン大学の正式名はライン・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学、ハイデルベルク大学はルプレヒト・カール大学、ミュンヘン大学はルートヴィヒ・マクシミリアン大学、ベルリンにあるのはフンボルト大学です。

もし同様の命名文化が日本でもっと強ければ、福澤諭吉、大隈重信、新島襄、西園寺公望(私塾立命館を創設、文相として京都帝大の創設を推進)、古河虎之助(九州帝大、東北帝大の建設費を寄附した古河財閥当主)などの名前が付くところだったのかもしれない。

(3) 駅名と大学名

大学名が駅名に付いている例として、新潟大学前駅、鳥取大学前駅、大分大学前駅、別府大学駅(以上、JR)、獨協大学前駅(東武)、東海大学前駅(小田急)、都留文科大前駅(富士急)、名古屋大学駅(名古屋市地下鉄)、和歌山大学前駅(南海)などがあり、大学からの要望により駅が設置されている場合もかなりあります。

大学の過去の**所在地や校名の歴史が駅名に残されている場合**があります。東急東横線の「学芸大学駅」、「都立大学駅」は、両大学とも23区外に移転し、駅名だけが残っています。東急電鉄では、駅名の変更を検討し、周辺住民へのアンケートを行ったこともありますが、賛成が3分の2を超えなかったため、そのままになっています。西武池袋線の「大泉学園駅」は、関東大震災後に、大学を誘致し一帯を学園都市にする計画があり、住所表記も大泉学園町になったものの、大学誘致が実現しないまま駅名が残ったものです¹⁴。誘致を目指していたのは今の一橋大だったと言われています。現在、大泉学園の名の付く小、中学校がありますが、戦後の設置です。高校の例として、西武新宿線の「都立家政駅」は、旧・高等家政女学校に由来しており、戦後、都立鷺宮高校に改名しましたが、駅名は維持されています。

大学・高校は入試と切り離せませんが、**受験生が合格祈願に訪れる駅**があります。JR徳島線には学(がく)という駅があり、ここの入場券は「入学」と印字されることから御守りとして人気があります。学の地名は、阿波国の学問所があったこと、あるいは学徳の高い僧のいる寺があったことに由来すると言われます。和歌山の紀州鉄道の学門駅、南海高野線の学文路(かむろ)駅の入場券も同じです。学門は、日高高校(前身は旧制日高中学など)の門があることに由来し、また、学文路には、菅原道真を祀る学文路天満宮があります。愛媛・久万高原町の郷角(ごうかく)という地区には、ごうかく駅というバス

停があり、ここの切符も人気があるそうです。

7 大学のレガシーの継承

(1) 大学の創設の由来

国(公)立大学には、「旧帝大」、「旧六」、「新八」、「三商大」などの分類がありますが、これらは、前身が帝国大学である**旧帝大**のほか、**旧六**(官立医学専門学校から1918(大正7)年の大学令により大学に昇格した旧制医科大学を前身に持つ千葉、新潟、金沢、岡山、長崎、熊本の6大学)、**新八**(官(県)立医学専門学校が起源で、戦後に医科大学へ昇格したという沿革の医学部を持つ弘前、群馬、東京医科歯科、信州、鳥取、広島、徳島、鹿児島)の8大学)、**三商大**(高等商業学校から大学令によって大学に昇格した一橋、神戸、大阪市立の3大学)のように、創設の経緯によって分類されています。ちなみに、**医学部が西日本に多い原因**として旧医専など医学部の前身校が西日本に多かったことが挙げられますが、この背景には明治政府に薩長土肥など西国出身者が多かったことがあると言われています。

私立大学の「**MARCH**」、「**日東駒専**」、「**大東亜帝国**」、「**関関同立**」、「**産近甲龍**」などの分類は受験産業が名付けたものであり、建学の経緯によるものではありません。例えば、「**MARCH**」は1960年代に旺文社の『**蛍雪時代**』が、「**関関同立**」は70年代に大阪の夕陽丘予備校が名付けたと言われています。これを建学の由来によって分類すれば、次のようなグループ分けになると思います。括弧内は、前身校、宗派または建学時の学問分野を表します。

〈**法律学校由来**〉早稲田(東京専門学校)、明治(明治法律学校)、中央(英吉利(イギリス)法律学校)、法政(東京法学社、のち和仏法律学校)、日本(日本法律学校)、専修(専修学校)、関西(関西法律学校)、立命館(京都法政学校)

〈**人文学由来**〉東洋(哲学館)、大東文化(漢学)、國學院(皇典講究所)

〈**理工学由来**〉東京理科(東京物理学講習所)、東海(望星学塾)、近畿(日本大学専門学校、のち大阪理工科大学)

〈**キリスト教系**〉青山学院、立教、関西学院、同志社(以上、プロテスタント系)、上智(カトリック系)、国際基督教(超教派)

〈**仏教系**〉駒澤(曹洞宗)、龍谷(浄土真宗)

〈**上記以外**〉慶應義塾(蘭学塾)、学習院(皇室の教育機関)、亜細亜(興亜専門学校)、帝京(帝京商業学校)、国士館(私塾国士館)、京都産業(経済学・理学)、甲南(旧制甲南高校)

(2) 建学の精神・創設の理念

こうした私学の起源は、各大学の**建学の精神**に表れています。例えば、東洋大の建学の精神は「諸学の基礎は哲学にあり」、大東文化大は「儒教に基づく道義の確立」、東京理科大は「理学の普及を以て国運発展の基礎とする」、同志社大は「キリスト教主義、自由主義、国際主義」、龍谷大は「浄土真宗の精神」などを掲げています。キリスト教系の大学は、奉仕を謳うものが多いようです。上智大は「Men and Women for Others, with Others」、関西学院大は「Mastery for Service」です。青山学院大は、新約聖書の教えである「地の塩、世の光」を掲げます。法律学校由来の大学は、自由や独立を謳うものが多く見られます。早稲田大は「学問の独立」、明治大は「権利自由、独立自治」、法政大は「自由と進歩」、立命館大は「自由と清新」、そして、関西大は「正義を権力より護れ」です。法律学校系以外でも、蘭学塾起

源の慶應義塾大が「独立自尊」、キリスト教系の立教大が「自由の学府」を掲げています。

国立大学には、私学と同じ意味での明確な「建学の精神」はないのですが、それぞれ基本理念を持っており¹⁵、例えば、京都大の「自由の学風」は、私学に似たところがあると言えます。このほか、北海道大の「フロンティア精神」「lofty ambition（高邁なる大志）」、東北大の「研究第一」「門戸開放」、一橋大の「Captains of Industry（産業界のリーダー）」などが歴史のある理念の例と言えます。

（3）同窓会

組織力を誇る**同窓会**の代表格は、慶應義塾大の「三田会」、早稲田大の「稲門会」、一橋大の「如水会」などです。「三田」は所在地名、「稲門」は校名から来ています。「如水」とは「君子の交わりは淡きこと水の如し」という礼記の言葉に由来し、濃密すぎない長続きする交流を期したものです。

教育界に影響を持つのが、東京高等師範学校・東京教育大・筑波大の同窓会「茗溪会」と、広島高等師範学校・広島文理科大・広島大の「尚志会」です。「茗」はお茶の意味で、「茗溪」は最初に師範学校が設置された昌平坂学問所跡地の御茶ノ水・湯島の地域を流れる神田川の別名です。東京高師のボート部は神田川で漕艇しており、ボートの名前を「茗溪」「昌平」にしていたそうです。広島の「尚志」とは、孟子の「志を尚（たかく）す」から来ています。

同窓会が設置した私立学校があり、東京女子高等師範学校・お茶の水女子大の同窓会「桜蔭会」が設置したのが、先述の女子学院、雙葉とともに首都圏における中学受験で「女子御三家」と言われる桜蔭中・高校であり、茗溪会が設置したのが茗溪学園中・高校（全国高校ラグビーで1988年に優勝、1989・2012年にベスト4）です。なお、尚志高校（全国高校サッカーで2011・2018年にベスト4）は、広島の尚志会の設置ではなく、旧制第二高等学校（現・東北大）のかつての同窓会名も尚志と言い、その同窓生の一人が設立した私学です。

旧制と新制の大学・高校文化の歴史性についていくつかの観点から見てみました。これまで大学や高校に関わる仕事をする中で興味を持った各校のルーツなどをもとにまとめたものですが、不正確な点などあればご指摘頂きたいと思います。『地域連携教育研究』第2号では、初等中等教育に関わる学校文化の事例を多く取り上げましたが、情報化の時代になっても、地域ごとに異なる学校文化が維持されている背景には、教職員や児童生徒の移動の範囲が多くの場合、都道府県内にとどまり、他地域の影響を受けにくいこと¹⁶、学校を卒業すると、他地域に移動したとしても、在学時代の学校内での習慣を話題にする機会や必要はなくなり、地域ごとの違いが気付かれにくいことなどが関係していると思われます。本稿で取り上げた大学・高校の伝統や文化の場合は、ブランド戦略、広報戦略の一環として、各校によって意図的、積極的に継承され、発信する努力が払われているものも少なからずあり、その意味で、各校の誇りとする歴史や沿革の一部として今後も活かされていくことが期待できると考えられます。

【参考文献】

- ・天野郁夫『大学の誕生（上）帝国大学の時代』『大学の誕生（下）大学への挑戦』（2009年、中公新書）
- ・天野郁夫『帝国大学—近代日本のエリート育成装置』（2017年、中公新書）
- ・おおたとしまさ『地方公立名門校』（2018年、朝日新書）
- ・国立近現代建築資料館『明治期における官立高等教育施設の群像』（2018年）

- ・高橋誠『日本の大学の系譜 源流と変遷をたどる歴史秘話と広報戦略』(2015年、ジヤース教育新社)
- ・竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』(2003年、中公新書)
- ・竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』(2011年、講談社学術文庫)
- ・橋本俊詔『京都三大学 京大・同志社・立命館 東大・早慶への対抗』(2011年、岩波書店)
- ・秦郁彦『旧制高校物語』(2003年、文春新書)
- ・八幡和郎・CDI『47都道府県の名門高校 藩校・一中・受験校の系譜と人脈』(2008年、平凡社新書)
- ・各大学、高校のホームページ

-
- 1 古城庸夫「日本におけるボート競技の起源についての考察」(2009年、『情報と社会 江戸川大学紀要』19巻)
 - 2 このほか、愛知・旭丘、岐阜、京都・同志社、山城、西京、大阪・市岡、兵庫・関西学院、神戸、兵庫、和歌山・桐蔭、鳥取・米子東、島根・松江北、大社が地方大会に皆勤出場である。
 - 3 春・夏の高校野球大会の開催経緯については、玉置通夫「高校野球の全国大会の発生起源についての考察—新聞社間の競争が促進剤になった—」(2012年、『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』(48))で知ることができる。
 - 4 大熊廣明ほか「高等師範学校・東京高等師範学校による学校体育の近代化とスポーツの普及に関する研究」(2005年、『筑波大学体育科学系紀要』28)。金栗四三は、我が国初のオリンピック選手の一人として、1912(明治45)年のストックホルムオリンピックに参加しており、2019年のNHK大河ドラマ『いだてん〜東京オリムピック噺〜』の主演の一人として描かれている。
 - 5 隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』(2018年、星海社新書)によると、同時期の英独仏と比べても徹底した文系・理系の区分が行われた背景には、日本の大学が、まずは法と工学の実務家育成を目的に作られ、そのための選抜機関として機能していたことがある。
 - 6 小石かつら(2015年、https://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/eu/activity/activity-research/20151214_2960/)による。
 - 7 有本真紀『卒業式の歴史学』(2013年、講談社)によると、より早く普及したのは「蛍の光」であり、「仰げば尊し」が浸透し、両者が対として歌われるようになるのは、明治中期以降である。
 - 8 田畑貞寿・宮城俊作・内田和伸「城跡の公園化と歴史的環境の整備」(1990年、『造園雑誌』53(5))、内田和伸「近世城跡に立地する近現代遺構について」(奈良文化財研究所『平成28年度遺跡整備・活用研究会報告書』)
 - 9 井上章一・郭南燕・川村信三『ミッションスクールになぜ美人が多いのか 日本女子とキリスト教』(2018年、朝日新書)
 - 10 米陸軍第八軍のうち、主に東日本を担当した第九軍団と西日本を担当した第一軍団との間で教育施策実施上の地域的濃淡が出た要因については、阿部彰「対日占領における地方軍政—地方軍政部教育担当課の活動を中心として—」(1982年、日本教育学会『教育学研究』49巻2号)で知ることができる。
 - 11 国立近現代建築資料館『明治期における官立高等教育施設の群像』(2018年)
 - 12 川島智生「昭和前期・鹿児島における学校建築の成立と特質について—鉄筋コンクリート造校舎と技師岩下松雄」(文教施設協会『文教施設』2017秋号)
 - 13 高橋誠『日本の大学の系譜 源流と変遷をたどる歴史秘話と広報戦略』(2015年、ジヤース教育新社)
 - 14 2015年7月14日付け「日本経済新聞」
 - 15 菅真城「国立大学に建学の精神はあるのか?—広島大学、大阪大学の場合—」(2008年、『広島大学文書館紀要』10号)
 - 16 佐藤高司「若年層の方言使用と『学校方言』」(2012年、『共愛学園前橋国際大学論集』(12))

Regional Characteristics and Origins of School Cultures in Japan: The Case of Universities and Senior High Schools

Masanobu MORITA

As the sequel of my first report of this theme, this paper is focused on the historicity of school culture of universities and senior high schools. The senior high school in the pre-war era was positioned as a higher education system, but the current senior high school is positioned as upper secondary education after the postwar reform of the school system. By looking at both pre-war and postwar higher education and upper secondary education from the viewpoint of school culture, many interesting points were found.

This report shows various historical examples in terms of students' sports, students' lives, the connection to the Samurai era, the history of women's education, school buildings, the origins of schools, the names of schools, the spirit of the school's foundation, alumni associations, etc. There are several findings about the history of Japanese universities and senior high schools in this study, such as: Some schools including former Imperial Universities and Normal Schools (Shihan-Gakko) has a long tradition of students' sports; Some schools have been located in the sites of former castles or taken over the traditions originated from the Samurai clan schools (Hanko); Private schools including Christian schools have played a huge role in women's education; Some historical school buildings are designated as cultural properties and functioning as symbols of the schools; The names of universities sometimes represent the unique history of each institutions.

Many of them have been and will be making the most of as resources of the brand power or public relation strategy for each institution.